

36 『コリトル先生がやってきた／くるくる沼のカツぱくん』成井豊

○ジヤンル／ファミリー・オペレッタ

○ストリー／ここはイギリスのロンドン。トミー・スタビンズは、動物学者のジョン・コリトル博士の助手。コリトル博士は世界中の動物たちと話ができる。ある日、日本に住むヒロミという男の子から手紙が来る。ヒロミは、動物図鑑にのっていない動物を見つけたらしく。コリトル博士はトミーと一緒に日本へ向かう。ヒロミの案内で、森の奥のくるくる沼に行くと、見たことのない動物が現れた。それは、カツぱだった……。

○出演者／男 11 + 女 6 + α 計 17 + α
○上演時間／90分

登場人物

コリトル先生

(世界的に有名な動物学者)

トミー・スタビンズ

(コリトル先生の助手)

オウムのポリネシア

(コリトル先生の助手)

イヌのジップ

(コリトル先生の助手)

アヒルのダブダブ

(コリトル先生の助手)

サルのチーチー

(コリトル先生の助手)

ブタのガブガブ

(コリトル先生の助手)

ヒロミ

(小学6年)

パパ

ママ

ニシカワ／レポーター

タクヤ

(小学6年)

カズコ
ヒロミ
村の子どもたち
カッパのゲック
カモメ
風たち・森の動物たち・お祭りの子どもたち

(小学6年)
(小学6年)

遠くから、カッコウの鳴き声が聞こえてくる。スズメの鳴き声も聞こえてくる。ニワトリの鳴き声も聞こえてくる。カラスの鳴き声も聞こえてくる。ウグイス、ホトトギス、アヒルの鳴き声も聞こえてくる。あたりは次第に暗くなっていく。ウグイス、ホトトギス、アヒルの鳴き声も聞こえてくる。ネズミ、ネコ、イヌ、サル、サルの鳴き声も聞こえてくる。ウマ、ウシ、ブタ、ヒツジ、ゾウの鳴き声も聞こえてくる。もうあたりは真つ暗だ。動物たちの鳴き声でいっぱいだ。すると、今度はすぐ近くから、ライオンの咆吼が聞こえてくる。一瞬の静寂。やがて、静かに音楽が始まる。ひとすじの光。そこに、一人の少年と、五匹の動物たちが立っている。少年の名前は、トミー・スタビンズ。

――――
M1 「耳をすましてごらん」

トミー

誰かが君に話しかけてる

木の枝の小鳥

おはようって言っているのさ

君に向かつて

耳をすましてごらん

きつとわかるよ 小鳥の言葉

少しだけ立ち止まって

聞いてみよう 小鳥の気持ち

トミー・五匹

トミーが一步前に出て、お客さんにお辞儀をする。

トミー

みなさん、こんにちわ。僕の名前はトミー・スタビンズ。まわりのみんなには、トミーって呼ばれてます。ところで、みなさん。みなさんは、動物と話をしたいと思っただけか？動物の好きな人なら、誰でも一度はそう思うんじゃないかな。木の枝で鳴いてる小鳥の気持ち、がわかつたら、きっと楽しいですよ。え？動物は言葉なんか話さない？あれは話してるんじゃないよ。鳴いてるだけだ？わかってないなあ。動物にだって心がある。人間と同じように、うれしいと思ったりかなしいと思ったりするんです。人間はうれしい時、友だちに向かって「うれしい」って言うんですよ。そうだよ？動物は動物の言葉で、「うれしい」

五匹の動物たちが、それぞれの鳴き声で返事をする。

トミー

誰かが君に話しかけてる

水槽の魚

おやすみって言っているのさ

君に向かつて

耳をすましてごらん

きつとわかるよ 魚の言葉

トミー・五匹

君も話してごらん

伝わるよ 君の気持ち

トミー

さあ、みなさん。耳をすましてください。これから僕の友だちが、動物の言葉で話をします。なんて言ったか、当ててみてください。まずは、イヌのジップ。

ジップ

ワン、ワンワンワン。

トミー

次は、アヒルのダブダブ。

ダブダブ

ガーガー、ガーガーガー。

トミー

次は、サルのチーチー。

チーチー

ウッキー、ウッキッキッキー。

トミー

次は、ブタのガブガブ。

ガブガブ

ブヒー、ブヒブヒブヒー。

トミー

最後は、オウムのポリネシア。

ポリネシア

みなさん、こんにちわ。

トミー

さあ、みなさん。僕の友だちがなんて言ったか、わかりましたか？ え？

トミー

ポリネシアの言ったことだけわかった？ それじゃ、なんて言ったんですか？ 「みなさん、こんにちわ」？ 本当かな。ねえ、ポリネシア。君は

トミー

本当に、「みなさん、こんにちわ」って言ったの？

トミー

言ったわ。

トミー

あれ、君は今、人間の言葉で話さなかった？

トミー

話したわ。

トミー

それじゃ、「みなさん、こんにちわ」っていうのも、人間の言葉で話したの？

トミー

それじゃ、「みなさん、こんにちわ」っていうのも、人間の言葉で話したの？

ポリネシア

トミー

そうよ。
それならわかるに決まってるじゃないか！ みなさん。ポリネシアは、物知りのオウムなんです。人間の言葉だって、僕よりずっとうまく話せるんだ。実を言うと、今年で一八四歳なんですよ。年より若く見えるでしょう？

ポリネシア

トミー

失礼しちゃうわね。私は一八四歳じゃないわ。一八三歳よ。
まあ、ポリネシアはいいとして、他の友だちの言葉はどうでしたか？ やっぱりわかりませんか？ え？ そういうおまえはどうなんだ？ おまえだってわからなかったんじゃないのか？ とんでもない！ 僕には全部わかりましたよ。ジップもダブダブもチーチーもガブガブも、「みなさん、こんにちわ」って言ったんです。

ポリネシア

違うわよ。ガブガブだけは、「おなかが空いた、腹ペコだ」って言ったの。

トミー

そうだったのか。実を言うと、僕はまだ、動物の言葉を勉強しはじめたばかりなんです。だから、難しい言葉はよくわからない。先生のポリネシアには、いつも怒られてばかりです。

ポリネシア

それは、トミーが授業中に居眠りばかりしてるからよ。まったく近頃の若い者ときたら――

トミー

（ポリネシアの口をふさいで）どうして僕が動物の言葉を勉強しようと思ったか。それは、ある人と出会ったからです。それまでの僕は、動物にも言葉があるなんて、考えたこともありませんでした。が、その人が実際に話をしているのを見て、いっぺんに気持ちが変わったんです。僕もその人みたいになりたいって、心の中で誓ったんです。その人は、世

界中の動物と話が出来ます。その人は、世界中の動物の友だちです。その人の名前は、ジョン・コリトル。

――――M2「教えて、コリトル先生」

トミー・五匹

教えて教えて　コリトル先生
教えて教えて　コリトル先生

トミー

門の前で待ってる犬に
ありがとうって話しかけたい
雨の降る日も傘をささずに
待っててくれるから
どんなふうに言えばいいの
なんて言えば伝えられるの
私の気持ち

トミー・五匹

教えて教えて　コリトル先生
教えて教えて　コリトル先生

反対側から、コリトル先生がやってくる。

コリトル先生

教えよう教えよう　動物の言葉

コ・ト

教えよう教えよう 動物の気持ち

屋根の上のぼった猫に

おりておいでと話しかけたい

花瓶を割ってしまったことは

もう怒ってないよと

どんなふうに言えばいいの

なんて言えば伝えられるの

私の気持ち

トミー・五匹

コリトル先生

トミー・五匹

コリトル先生

トミー

コリトル先生

ジップ

コリトル先生

ダブダブ

コリトル先生

チーチー

教えて教えて コリトル先生
教えてよう教えよう 動物の言葉
教えて教えて コリトル先生
教えよう教えよう 動物の気持ち

みなさん、ご紹介します。この人が、僕の先生、ジョン・コリトルです。そうです。私がジョン・コリトルです。

ワン！ ワンワンワン！
こら、ジップ。静かにしなさい。今、みなさんに、ご挨拶をしていると

ころなんだから。

ガーガー！ ガーガー！

なんだ、ダブダブまでお行儀の悪い。

ウッキー！ ウッキッキッキー！

コリトル先生
ガブガブ
コリトル先生
トミー
コリトル先生
トミー
コリトル先生
ジップ
コリトル先生
ダブダブ
コリトル先生
チーチー
コリトル先生
ガブガブ
コリトル先生
トミー
コリトル先生
トミー
コリトル先生

チーチー、おトイレはそこを出て右へ行くんだよ。
ブヒー！ ブヒブヒブヒー！
ガブガブ、ごはんはさつき食べたばかりでしょう？
先生。みんなが騒いでいるのは、何か用事があるからみたいですよ。
私は今、忙しいんだ。用事があるなら、ご挨拶をすましてから聞こう。
えー、みなさん。私がジョン・コリトルです。
でも、なんだか急ぎの用事みたいですよ。
もう、せつかく素敵なご挨拶を考えてきたのに。しかし、急ぎの用事と
いうのはなんだろうな。(ジップに) ワン、ワンワンワン？
ワン、ワンワンワン。(外を指さす)
ワンワンワン？(外へ出て行こうとする)
ガーガー、ガーガーガー。(先生を引き戻す)
ガーガー？ ガーガーガー？(五匹を見回す)
ウッキー！(封筒を差し出す)
(封筒を受け取って) ウッキー、ウッキッキッキー。
ブヒー！ ブヒブヒブヒー！(封筒を開けるように催促する)
(封筒を開けて、便箋を取り出し) ブヒー、ブヒブヒブヒー。
どうです、みなさん。僕の言った通りでしょう？ 先生は世界中を旅し
て、世界中の動物の言葉を研究してきたんです。先生には、話せない言
葉なんて、一つもないんですよ。
ブヒー！ ブヒブヒブヒー！
どうしたんですか、先生？
ブヒブヒ、ブヒブヒブヒー！(便箋をトミーに突き出す)

トミー
コリトル先生
「ブタ語で話したらわかりませんよ。人間の言葉で話してください。たいへんだぞ、スタビンズくん。この手紙は、日本から来たものだったんだ。」

トミー

コリトル先生
「日本から？」

トミー
コリトル先生
「差し出し人は、ヒロミという名前の男の子だ。ヒロミって言ったら、普通は女の子の名前ですよ。しかし、この子は男の子だ。その証拠に、手紙には「僕」と書いてある。」

コリトル先生が手紙を読む。

コリトル先生
「前略、コリトル先生。僕は不思議な動物と友だちになりました。動物図鑑を調べても、どこにも載ってませんでした。せっかく友だちになれたのに、なんて動物かわからない。話もできない。とてもさびしいです。」

動物は、いつも『ゲックゲック』と鳴いています。先生は、世界中の動物と話ができるんですよね？ だって、この動物がなんて言うてるのか、わかりますよね？ コリトル先生、すぐに日本へ来てください。僕と動物の、通訳をしてください。お願いします。ヒロミ」

トミー
コリトル先生
「へえー、動物図鑑に載ってない動物か。もしかしたら、新しい種類の動物かもしれない。ヒロミくんという男の子は、この動物を世界で初めて発見したんだ。」

トミー

コリトル先生
「あー、私もこの動物に会ってみたい！ よし、スタビンズくん。すぐに日本へ出発しよう。」

トミー
コリトル先生
トミー
コリトル先生

トミー

コリトル先生
トミー
コリトル先生
トミー
コリトル先生
トミー
コリトル先生

すぐつて、今すぐですか？
手紙に書いてあるだろう。「すぐに日本へ来てください」つて。

でも、日本へ行くなら、いろいろと準備しないと。

準備している間に、この動物がいなくなったらどうするんだ。せつかく友だちになれたのに、話もしないで別れたら、ヒロミくんはますますさびしくなってしまう。

わかりました。今すぐ、出発しましょう。ジップ、ダブダブ、チーチー、ガブガブ、ポリネシア。君たちは、船に食料を運んでくれ。僕は着替えを持ってくる。先生は、地図と磁石をお願いします。

そう言えば、私はまだ日本へ行ったことがなかったな。

イヤですよ、途中で迷子になったら。

大丈夫、大丈夫。日本は東の果てにある国だ。海に出たら、とにかく東へ東へと進むことにしよう。

そんなんで、ちゃんと着くのかなあ。

もし迷子になったら、海の魚に、「日本はどこですか？」つて聞けばいいじゃないか。

なるほどね。

よし、出発だ！

五匹の動物たちが、マストを立て、帆をはる。その下に、コリトル先生とトミーが立つ。たくさんの風たちがやってくる。風たちが吹く。それはまるで、一つ一つの風が踊っているように見える。

——— M 3 「風は僕らの味方」

コ・ト

旅に出よう出よう出よう
そう思ったら
指を空に空に空に
向かって立てろ
風は教えてくれるだろう
行きたい時に行きたいところへ行けと
だから僕らも行こうよ
どこか遠くへ行こうよ
風も僕らを応援してるよ
風は僕らの味方

コ・ト・五匹

トミーが双眼鏡をのぞく。

トミー
コリトル先生

先生、なかなか日本に着きませんね。どうやら迷子になったようだな。しかし、心配する必要はない。海の魚に、「日本はどっちですか？」って聞くことにしよう。

トミー
ポリネシア

でも、サカナなんて見当たりませんよ。トミー、あそこにカモメがいるわ。

コリトル先生

本当だ。先生、あのカモメに聞いてみましょう。クワー、クワクワクワー。（手を振る）

カモメが飛んでくる。

カモメ
コリトル先生
カモメ
コリトル先生

クワー、クワクワクワー。
クワクワ。クワクワクワ？（前方を指さす）
クワクワクワ。（反対の方角を指さす）
クワー！ クワクワクワー！（手を振る）

カモメが去る。

トミー
コリトル先生

先生、カモメはなんて言ったんですか？日本はこっちの方角じゃないそうだ。この船は、全く反対の方角へ向か

トミー
コ・ト

やっぱりそうか。先生、急いで引き返しましょう。

風はいつもいつもいつも

コ・ト・五匹

旅をしている
空がずっとずっとずっと
続かなかぎり
空には国境がないから
行きたい時に行きたいところへ行ける
だから僕らも行こうよ
どこか遠くへ行こうよ
風も僕らを応援してるよ
風は僕らの味方

コリトル先生、
トミー、五匹の動物たちが去る。風も去る。

小学生の男の子がやってくる。名前はヒロミ。反対側から、ニシカワ先生と村の子どもたちがやってくる。

ニシカワ

ヒロミ

ニシカワ

ヒロミくんというのは、君ですか？
そうですけど。

私は、この村の小学校で先生をしている、ニシカワという者です。そんなことより、ヒロミくん。君は今、くらくら森の方から歩いてきましたね？ まさか、一人でくらくら森へ行っただけですか？

ヒロミ

ニシカワ

行きました。
なんとという恐ろしいことを！ まさか、中には入らなかったでしょうね？

ヒロミ

ニシカワ

入りました。
なんとという恐ろしいことを！ 君がこの村に来たのは、生まれて初めてだ。しかし、君のお父さんは、この村で生まれたんですか？ くらくら森について、お父さんは何も言っていなかったんですか？

ヒロミ

ニシカワ

別に何も。
それなら、私が教えてあげましょう。いいですか、ヒロミくん。くらくら森には、昔からの言い伝えがあるんです。一人で中に入った者は、二度と出てこれないって。

くろくろくろくろくろくろ
くろい影が住んでいる

ヒロミ
ニシカワ

それが幽霊だって言うんですか？
そうです。くらくら森の奥には、くろくろ沼という小さな沼がある。幽

ヒロミ

アハハハハ！

ニシカワ

：：何がおかしいんですか？

ニシカワ

だって、大人のくせに、本気で幽霊を信じてるんだもん。
仕方ないじゃないですか。目撃者がたくさんいるんだから。そうでしょ

タクヤ

う、タクヤくん？
うちのお父さんは、小学校の時に見たって。

カズコ

カズコさんのパパも見たんだよね？
うちのパパは二回も見たって。二回目は、背中から抱きつかれて、あわ

ニシカワ

てて逃げ出したんだって。
ほらね。やっぱ幽霊は存在するんです。

ヒロミ

存在なんかしませんよ。君たちのパパが見たのは、きっとゲックだよ。

ニシカワ

なんです、そのゲックというのは。
くろくろ沼に住んでいる動物です。なんて種類の動物かはわからないけ

ニシカワ

ど、いつも「ゲックゲック」って鳴くんです。だから、僕はゲックって
呼んでるんだけど。

ヒロミくん。ウソをついてはいけませんよ。「ゲックゲック」なんて鳴
く動物がいるもんですか。

ヒロミ
ニシカワ
ヒロミ
ニシカワ

ヒロミ
ニシカワ

ニシカワ先生が去る。

でも、僕は見たんです。友だちになつたんです。なんという恐ろしいことを！君は、幽霊とお友だちになつたんですよ。幽霊じゃないって言ってるでしょう？

ヒロミくん。どうせ友だちになるなら、この村の子どもと友だちになつたらどうです。タクヤくんやカズコさんなら、くらくら森なんかより、ずっと楽しい所へ連れていってくれますよ。

くらくら森だつて、楽しいですよ。

とにかく、くらくら森へは二度と行ってはいけません。わかりましたね？

タクヤ
カズコ
タクヤ
カズコ
タクヤ

小ヒロミ
タクヤ

カズコ

幽霊と友だちになるやつなんかと、一緒に遊びたくないよな。あたしたちより、幽霊の方が好きなんでしょう？

変わったるんだよ。名前だつて、ヒロミだし。

ヒロミつて、女の子の名前じゃない。

（横にいた小さい女の子に）そう言えば、おまえもヒロミつて名前だよな？

（うなずく）

だつたら、二人で遊べよ。ヒロミはヒロミと遊ぶのが一番だよ。じゃあな。

じゃあね。

小学生たちが去る。ヒロミと小さいヒロミだけが残る。

小ヒロミ ヒロミって、変な名前じゃないよね？

ヒロミ ……うん。

小ヒロミ (ニッコリ笑って) じゃあね。

小さいヒロミが去る。

ヒロミ 　　ただいま。

ママがやってくる。

ママ おかえり、ヒロミ。今日はどこへ行ってきたの？

ヒロミ 　　くらくら森。

ママ また、くらくら森？　もしかして、また一人で行ったの？

ヒロミ 　　そうだよ。

ママ そうだよ、じゃないでしよう？　遊びに行く時は、おとなりのタクヤク

ヒロミ 　　んと一緒に行きなさいって言ったじゃない。

ママ タクヤくんは、僕と遊びたくないんだって。

ヒロミ 　　どうして？

ママ 僕の名前が、変わってるから。

ヒロミ また、女の子の名前みたいだって、いじめられたの？　そんなの、いち

ママ 僕は、あんまり好きじゃない。

ヒロミ 　　今、言ったこと、パパには秘密ね。

ママ 　　パパはヒロミが生まれた時、名前を

ヒロミ 　　考えるのに一週間も徹夜したの。ヒロミが好きじゃないって知ったら、

ママ 泣き出しちゃうかもしれない。

ヒロミ
ママ

だって、男の子がヒロミなんて、やっぱり変だよ。そうやって、自分が変だと思うから、他の子にも変だと思われちゃうのよ。タクヤくと友だちになりたかったら、何を言われても気にしないの。

ヒロミ

いいよ、僕にはもう友だちがいるから。

ママ

誰？

ヒロミ

ゲックだよ。ゲックは人間の言葉が話せないから、僕の名前が変わって

ママ

るなんて、絶対に言わない。

ヒロミ

またゲックの話？ ヒロミ。作り話でごまかすのはやめなさい。

ママ

作り話じゃないよ。ゲックは本当にいるんだよ。

ママ

もう、この子は困るとすぐにウソをつくんだから。パパ、パパ。

パパがやってくる。

パパ

どうしたんだ、ママ。

ママ

ヒロミったら、今日も一人で遊びに行ってきたんですって。おとなりの

パパ

タクヤくと遊ばないで。

パパ

なんだ、またいじめられたのか？ 男なら、やられたらやり返すくらいの

ママ

の根性がないとダメだぞ。

ママ

まあ、パパ。子どもにケンカをすすめないでください。

パパ

いいか、ヒロミ。ヒロミをパパの田舎へ連れてきたのはな、ヒロミに強

くなつてほしいからなんだ。自然は人間を鍛えてくれる。山に登れば体が丈夫になるし、苦しさを我慢することで心もたくましくなる。

ヒロミ
パパ

僕も強くなれるかな？
なれるさ。一度強くなってしまえば、もう誰にもいじめられずにすむんだ。

ヒロミ

でも、どうしたら強くなれるの？

ヒロミ

強くなるためには、あるものが必要なんだ。なんだと思う？

ヒロミ

根性？

ママ

いや。

ヒロミ

体力？

ヒロミ

いや。

ヒロミ

わかんないや。教えてよ。

今のヒロミに一番必要なもの。友だちさ。

――――
M5 「友だちは背中を押す手」

パパ

もう一歩も歩けないほど
疲れてしまったも

ががんばれって声を聞けば

もう一度 歩き出そうと思う

パパ・ママ

友だちは背中を押す手
疲れた僕の背中を押す手

ママ

もう誰も好きにならないと

パパ・ママ

心を閉ざしても
がんばれって君が言えば
もう一度 好きになろうと思う

友だちは背中を押す手
疲れた僕の背中を押す手
だから僕も背中を押すよ
いつも君の背中を押すよ
僕は君の背中を押す手

ヒロミ

パパ

ヒロミ

パパ

ママ

ヒロミ

ママ

友だちがいれば、「がんばれ」って言ってもらえるんだね？
ヒロミだって、「がんばれ」って言ってあげられるんだよ。
でも、僕の友だちは、人間の言葉が話せないからなあ。
なんだ。ヒロミにはもう友だちがいるのか？
その話は、また後にしましょう。そうだ。私、見たいテレビがあつたの
よ。

(ママに) どうしてゲックの話をしちやいけなの？
(ヒロミに) パパが聞いたら、怒るからよ。さあ、テレビをつけるわよ。

反対側に、大きなテレビが置いてある。ママがテレビのスイッチを押す。

テレビの中に、コリトル先生、トミー、五匹の動物たちが現れる。

ヒロミ　　あつ！　コリトル先生だ！

レポーターが現れる。強引に間に割り込み、コリトル先生にマイクを向ける。

レポーター

コリトル先生、今回日本へ来た目的はなんですか？

レポーター

それは秘密です。どうして秘密なんですか？　他の人に知られたら、何かまずいことでも

コリトル先生

あるんですか？　そういうわけじゃないですけど。

レポーター

わかった！　お相撲さんになるために来たんでしよう。最近、外国人

コリトル先生

の力士がたくさん活躍していますからね。実はそうなんです。私の国でも、お相撲は大変なブームになっていま

レポーター

すからね。――違う！　どうして私がお相撲なんかしなくちゃいけないんだ！

コリトル先生

しかし、先生の体格なら、横綱は無理でも、大関ぐらいまでなら行けますよ。

そうですか？　じゃあ、今日からシコとテツポウでも始めようかな。

——違う違う！　なんて失礼なことを言う人だ。ジップ、ダブダブ、チーチー、ガブガブ、ポリネシア。この人に、礼儀というものを教えてあげなさい。ワン、ガー、ウキ、ブヒ、さあどうぞ！

五匹の動物たちが、レポーターに飛びかかる。

レポーター

アレー！

トミー　先生。こんなところでグズグズしてないで、早くヒロミくんの所へ行きましょう。

ヒロミ

あつ！　今、ヒロミくんて言った！

コリトル先生　わかっているわかってる。しかし、日本へ来たのは初めてなんだ。ヒロミくんのいる村がどこにあるのか、すぐにはわからないよ。

ヒロミ

ここでですよ！　僕はここにいるんですよ！

パパ

ヒロミ、さっきから何を言ってるんだ？

ママ

コリトル先生が、僕に会いに来たんだよ。

ヒロミ

あなたに会いに？　またウソについて。

ヒロミ

ウソじゃないよ。「日本へ来てください」って手紙を出したら、本当に来てくれたんだ。

パパ

本当か？

ヒロミ

本当だよ。信じてよ。(テレビに向かって)　コリトル先生！　僕はここにいますよ！

コリトル先生

ん？　今、誰かが私を呼んだような。

パパ

コリトル先生！　ヒロミはここにいますよ！　うちのヒロミはここです

よ！

コリトル先生

確かに私を呼んでいる。私を呼ぶのは誰だ？

ヒロミ

僕ですよ！ ヒロミですよ！

パパ

私はヒロミのパパですよ！

コリトル先生

こつちだ。行くぞ、スタビンスくん。

トミー

でも先生、そっちはカメラがあるだけですよ。

コリトル先生

なーに、カメラのレンズなんか、私のツツパリでブチ破ってやる。タア
ーッ！

コリトル先生がテレビの中から飛び出してくる。トミーと五匹の動物たちも、後からついでに
いてくる。

ヒロミ

コリトル先生！

コリトル先生

やあ、君がヒロミくんか。お手紙ありがとう。私がジョン・コリトルで
す。

パパ

見事なツツパリでしたね。

コリトル先生

あなたはヒロミくんのパパですね？ そして、あなたがママ。

ママ

このテレビ、壊れちゃったんですけど。

コリトル先生

小さいことを気にしてはいけません。はじめまして。私がジョン・コリ
トルです。

トミー

僕は先生の助手のトミー・スタビンス。こつちの動物たちは、みんな先
生の家族です。

パパ

なかなかにぎやかなご家族ですね。

ママ
コリトル先生

ママ

ヒロミ

パパ

ママ

ヒロミ

ママ

ヒロミ

コリトル先生

ヒロミ

ママ

ところで、今日はうちのヒロミになんのご用でしょう。実は、ヒロミくんに手紙をもらいましてね。友だちになった動物と話したいから、通訳をしてほしいと。友だちって、まさか？

ゲックだよ。

ん？ ゲックというのなんだ？

なんでもないのよ、あなた。(ヒロミを隅の方へ引っ張って行って) どうしてコリトル先生を呼んだりしたの。ゲックなんて、作り話のくせに。作り話じゃないよ。ゲックは本当にいるんだよ。

先生にはすぐに帰ってもらいなさい。ちゃんと謝ってから。

イヤだよ。僕はゲックと話がしたいんだ。

どうしたんだね、ヒロミくん。私は一秒でも早く、君の友だちに会いた
いんだが。

行きましょう、先生！

ヒロミ、待ちなさい！

ヒロミがコリトル先生の手を引っ張って走り去る。トミーと五匹の動物たちも後を追って去る。パパとママは反対側へ去る。

———
M 6 「真夏の森の夢」

くらくら森の中。たくさんの動物たちが現れる。暗い森の中を自由に駆け回る。ふと、一匹が動きを止めて、耳をすます。他の動物たちも動きを止める。そこへ、ヒロミがやってくる。後から、コリトル先生、トミー、五匹の動物たちもやってくる。

トミー

まだ昼間なのに、夜みたいで暗いですね。

コリトル先生

おまけにまだ夏なのに、冬みたいに寒いなあ。

トミー

なんだか、幽霊でも出てきそうだ。

ヒロミ

くらくら森には、昔からの言い伝えがあるんです。一人で中に入った者は、二度と外に出られないって。

トミー

どうして？

ヒロミ

幽霊につかまってしまうから。

コリトル先生

キヤーツ！

トミー

先生、おどかさないください！

コリトル先生

私はゴリラもライオンもこわくないけど、幽霊だけはダメなんだ。こういう時は、みんなで歌を歌って元気を出そう。

トミー

みんなの歌を歌いますか？

コリトル先生

みんなで歌える歌は一つしかないだろう。さっきヒロミくんにも教えても

らった歌だ。

―――| M 7 「くらくら森のくろくろ沼・2」

コ・ト・五・ヒ

くろくろくろくろくろくろくろ
くろくろ沼には
くらくらくらくらくらくらくらくら
くらくらくらくらくらくらくらくら
くらくらくらくらくらくらくらくら
くらくらくらくらくらくらくらくら

コリトル先生

誰かが岸を歩いていくと
くらくらく影が浮かび出る
そつと足に手を伸ばして
ベチャリと巻きつく（ギャーッ！）
わめいても もがいても
もう逃げられない
くらくらく影に引っ張られて
沼の底に沈んでいく

コ・ト・五・ヒ

くろくろくろくろくろくろくろ
くろくろ沼には
くらくらくらくらくらくらくらくら
くらくらくらくらくらくらくらくら
くらくらくらくらくらくらくらくら
くらくらくらくらくらくらくらくら

ヒロミ
コリトル先生

ヒロミ

トミー

コリトル先生

トミー

コリトル先生

トミー

コリトル先生

トミー

ヒロミ

コリトル先生

トミー

コリトル先生

トミー

コリトル先生

ヒロミ

コリトル先生

いたら、すぐに出てくるはずなんだけど。

私たちが来たから、こわがって隠れてるんだろう。ヒロミくん、ゲックに「心配しないで出ておいで」と言ってみなさい。

ハイ。ゲック！ 僕だよ！ ヒロミだよ！ 心配しないで出ておいで！ やっぱり出てきませんね。

それはそうだ。ゲックには、人間の言葉が通じないんだからな。それじゃ、どうすればいいんですか？

よし。みんなで笑おう。

どうしてですか？ 私たちが笑っているのを見たら、ゲックだって安心するに違いない。「何がおかしいのかな？」って、顔を出すかもしれないぞ。

わかりました。笑いましょう。さあ、みんな、笑うんだ。でも、なんにもおかしくないのに、笑えませんかよ。

よし。それでは私が、とっても楽しい話をしてあげよう。楽しい話を聞けば、笑えるだろう？

お願いします、先生。

（咳払いをして）もしもし、もしもし。あれ？ 誰も電話にでんわ。アハハハ！ アーハハハ！ どうしたみんな。なぜ笑わないんだ。

全然楽しくないからですよ！

そうか。それなら、こういうのはどうだ。先生！ 静かにしなさい、ヒロミくん。次の話は、さっきのよりもっと楽しいんだから。

ヒロミ
コリトル先生
ヒロミ
トミ
ヒロミ

出てきました。出てきましたよ。
なんだ。君も何か楽しい話が出てきたのか？
そうじゃなくて、ゲックが！
どこだい？
あそこです！（指をさす）

沼の向こう岸に、ゲックが立っている。

コリトル先生
トミー
コリトル先生

だって、初めて会った動物の言葉が、すぐに話せるわけないだろう？
だったら、他の動物の言葉で試してみればいいじゃないですか。
なるほど、それはなかなかの名案だ。世界中の動物の言葉で、「こんにちわ」って言えば、中には通じる言葉があるかもしれない。よし、さっそく試してみよう。

—————
M 8 「こんにちわって言ってほしい」

コ・ト

僕の声が聞こえたら
聞こえたって言ってほしい
こんにちわって聞こえたら
こんにちわって言ってほしい
黙っていたらいつでも
友だちにはなれないから

トミー
コリトル先生
トミー
コリトル先生

こんにちわ　ゴリラくん
ウホウツホ　ウホホウホ
こんにちわ　ライオンくん
ガオガオ　ガオガオ

ゲックが背中を向ける。

トミー
コリトル先生

先生、ゲックが向こうへ行ってしまう！
ゴリラもライオンもダメか。両方とも、日本にはいない動物だからな。

トミー

ゲツクの知ってる動物じゃないとダメなんですね？
という事は、このあたりにいそうな動物ってことだ。

トミー

こんにちわ キツネくん

コリトル先生

コンココン ココンコン

トミー

こんにちわ タヌキくん

コリトル先生

ポンポコン ポコポコン

ゲツクが二、三歩、向こうへ行ってしまう。

トミー

先生、タヌキはポンポコなんて鳴かないでしょう！
まあまあ、怒らないで。さっさと次の動物に行こう。早くしないと、ゲツクがまた隠れてしまうぞ。
わかりました。他に、このあたりにいそうな動物っていうと……。

トミー

こんにちわ イタチくん

コリトル先生

キーキキー キキーキー

トミー

こんにちわ カワウソくん

コリトル先生

クワクワー クワクワクワ

ゲツクがこっちへ戻ってくる。

トミー 先生！ ゲツクがこっちへ戻ってきました！

コリトル先生

やったあ！ ついにやったぞ！

トミー

そうか、カワウソの言葉か。カワウソは泳ぎが得意だから、川や沼の近

コリトル先生

くで暮らしてる。ゲックとは、きつとなかよしなんだ。

ゲック

よし。カワウソの言葉で、ゲックに話しかけてみよう。クワクワ、クワ

トミー

ックワ？ クワクワ、クワックワ？

コリトル先生

話した！ ゲックが話しましたよ！

ゲック

静かに静かに。話したのはいいが、やっぱりカワウソの言葉とは少し違

コリトル先生

うようだ。クワック、クワックワ？

ゲック

クエック、クエックエ。

コリトル先生

クエック！ クエックエ！

ゲックが向こう岸から泳いでくる。

トミー

先生、通じたんですか？

コリトル先生

通じた通じた。いやいや、一時はどうなるかと思ったよ。

ヒロミ

先生、僕の言葉を通訳してください。

コリトル先生

その前に、ゲックの名前を聞いてみよう。クエック、クエクエ？

ゲック

クエクエ、ゲック。

ヒロミ

ゲック？ ゲックの名前は、ゲックだったんですか？

コリトル先生

そうだ。ゲックはいつも、君に自分の名前を教えていたんだ。

トミー
ヒロミ
コリトル先生
ヒロミ
コリトル先生
ゲック
ヒロミ

ゲックかあ。カッパの名前って、やっぱり少し変わってるなあ。そんなことないですよ。僕はとつてもいい名前だと思う。私もなかないと思う。しかし、一番いいのはやっぱりジョンだな。ゲック、僕も名前を教えるよ。僕の名前はヒロミ。クエックエ、ヒロミ。……ヒ、ロ、ミ。そうだよ。ヒロミっていうんだ。

ゲックがヒロミの手をつかんで、向こうへ引つ張って行こうとする。

トミー
ヒロミ
コリトル先生
ゲック
コリトル先生
トミー
コリトル先生

ヒロミくんを、どこかへ連れていきたいのかな。ゲックはいつも、沼の向こう岸へ連れていこうとするんです。僕は、帰れなくなると困るから、いつも断ってるんだけど。クックエ、クックエック？ エックエ、ヒロミ、エックエック。ヒロミくんは、見せたいものがあるんだそうだ。見せたいものってなんでしょう？ とにかく、私たちも行ってみよう。

ゲックとヒロミが、泳いで向こう岸へ行く。コリトル先生、トミー、五匹の動物も後を追いかける。

ニシカワ先生と村の子どもたちがやってくる。

ニシカワ

そうか。幽霊の正体はカツパだったんですね。

タクヤ

先生、カツパってなんですか？

ニシカワ

伝説の動物です。昔の本を読むと、カツパの絵や話がたくさん出てきま

す。川や沼の中に住んでいて、人間がそばを通るたびに、イタズラをす

カズコ

悪い動物なんですか？

ニシカワ

とつても悪い動物です。中には人間に襲いかかって、水の中へ引きずり

タクヤ

こむやつもいたんですよ。なんという恐ろしいことを！

ニシカワ

残念ながら、一匹も。そのうち、あまり姿を見せなくなつたので、「カ

カズコ

ツパなんて本当はいないんだ」と思われるようになったんです。

ニシカワ

まさか私たちの村にいるとは思いませんでした。それを、都会から遊び

タクヤ

にきた子どもに、先に見つけられるなんて。

ニシカワ

ヒロミはカツパをどうするつもりなのか。

タクヤ

自分のものにするつもりでしょう。コリトル先生を呼んだのは、カツパ

ニシカワ

に自分の言うことを聞かせるためです。うまくだまして、都会へ連れて

カズコ
ニシカワ

タクヤ
ニシカワ

カズコ
ニシカワ

ニシカワ先生と村の子どもたちが去る。反対側から、ゲックとヒロミがやってくる。後から、コリトル先生、トミー、五匹の動物たちもやってくる。

トミー
コリトル先生
トミー
ずいぶん奥まで来ちゃったなあ。
私はもう疲れたよ。ここでしばらく寝てるから、帰りに起こしてくれ。
ダメですよ。通訳がいなくちゃ、話ができないじゃないですか。

ゲックが木の枝を指さす。

ゲック

クエック！　クエック！

行こうっていうんです。
どうして都会へ？

有名になれるからですよ。本物のカッパを捕まえたって言えば、テレビにだって出られるかもしれない。「シヨック！　私はこうしてカッパを捕まえた」とかなんとか言っちゃって。なんという恐ろしいことを！
でも、あのカッパは、この村のものでしょう？

もちろん、私たちのものです。たとえ悪い動物でも、私たちの手で守らなければなりません。

おまわりさんに逮捕してもらいましょう。

今は無理です。彼らはまだ、何も悪いことをしていないんですからね。彼らがカッパを森の外へ連れ出そうとした時、初めて盗んだことになるんです。さあ、私たちは、森の入口で待ち伏せしていきましょう。

トミー

コリトル先生

ポリネシア

ゲック

トミー

コリトル先生

チーチー

先生、あれはなんでしょう？

あれは、服の一種だな。日本人がお祭りの時に着るものだろう。あれは、ハッピーって言うの。

エック！ エック！

ゲックはなんて言ってるんですか？

「取れ」って言ってるんだ。チーチー、君は高い所が得意だな？

私の

肩の上に乗るなさい。ウッキー、ウキウキウキ。ウッキー！

コリトル先生がチーチーを肩車する。チーチーがハッピーを取り、ゲックに渡す。

ゲック

トミー

コリトル先生

ヒロミ

トミー

コリトル先生

ヒロミ

コリトル先生

ゲック

コリトル先生

トミー

クエク、クエク。

今度はなんて言ってるんですか？

「返す」と言ってるんだ。このハッピーは、ヒロミくんのものなのかね？ 違います。

このハッピーはボロボロですね。何十年前のものじゃないですか？

しかし、ゲックは「返す」と言ってるんだ。

(ゲックに)これは、僕のものじゃないよ。

クック、エクエック。

クック、クエック。エーク、クエク。エークエ、クク、エクエ。エククエ、クークエ。

長いなあ。

文句を言わないで、早く通訳してください。

コリトル先生

ゲック

ヒロミ

コリトル先生

ヒロミ

コリトル先生

ヒロミ

コリトル先生

ヒロミ

トミー

ヒロミ

えーと、「君のものだ。だから返す。そのかわり、約束を守れ。お祭りに連れていけ」と言ったんだ。(ゲックに) そうだよね？

(うなずいて) クエ。

約束なんてしてないのに。

まあ、いいじゃないか。せつかくくると言ってるんだから、素直にも

らっっておきなさい。

お祭りにも連れていくんですか？

仕方ないだろう、行きたいって言ってるんだから。

ゲックが村へ出ていったら、大騒ぎになるんじゃないかな。

友だちなら、なんとかしてあげればいいじゃないか。

わかりました。僕がなんとかします。

それで、お祭りっていつなの？

それが、今夜なんだ。

村の広場。ハッピを着た子どもたちがやってくる。明るい広場の中を元気に踊り回る。
そこへ、浴衣姿のパパとママがやってくる。

ママ、ヒロミはどこへ行ったんだ？
ママ パパ コリトル先生と出かけたまま、帰ってこないんですよ。
ママ パパ 早くしないと、お祭りが始まってしまふぞ。この村へ来た日から、ずつ
ママ パパ と楽しみにしていたはずなのに。
ママ パパ 学校ではいじめられてばかりいたから、お祭りで騒ぎたいって思ったん
ママ パパ でしょうね。
ママ パパ しかし、この村へ来ても、やっぱいいじめられてるんだろう？
ママ パパ おかげでいつも一人ぼっち。毎日毎日くらくら森なんかへ行つて。
ママ パパ へえー、ヒロミはくらくら森なんかへ行つてるのか。あそこは誰も入っ
ママ パパ ちやいけないことになってるんだぞ。
ママ パパ 毎日注意してるんですけれど。
ママ パパ それでも行くのか。なかなか根性が出てきたじゃないか。
ママ パパ 私は困ってるんですよ。変な動物と友だちになったなんて、作り話まで

パパ
ママ

するんだから。
変な動物？
いいえ、なんでもないんですよ。

そこへ、コリトル先生とトミーがやってくる。

コリトル先生

あれ、ヒロミくんのパパさんとママさんじゃないですか。こんばんわ。

パパ

こんばんわ、コリトル先生。

ママ

あら、うちのヒロミは一緒じゃなかったんですか？

コリトル先生

ああ、ヒロミくんならゲックと——

トミー

いや、さっきまで一緒にいたんですけど、ちよつと家に寄ってくるって

ママ

言うんで、別れてきました。

ママ

何しに行ったのかしら。

コリトル先生

実はゲックと——

トミー

いや、お祭りへ行くから、着替えるとか言ってたなあ。

ママ

まあ、着替えがどこにしまつてあるか、あの子にわかるかしら。私、ち

ママ

よつと行って見てきます。

コリトル先生

それは困ります。今、家へ帰ったら、中にはゲックが——

トミー

いや、今、帰ったら、お祭りが始まつちやいますよ。ここで待っていれ

ママ

ば、そのうち来るでしょう。

ママ

そうですか？

トミー

(コリトル先生を隅へ引っ張っていき) 先生、ゲックのことは秘密にし

ておくって約束したじゃないですか。

コリトル先生
すまんすまん。私はウソをつくのが下手なんだ。今度からは気をつけるよ。

そこへ、ニシカワ先生と村の子どもたちがやってくる。周りをキョロキョロ見回して、息をハーハー吐いている。

ニシカワ
こんばんわ、コリトル先生。

コリトル先生
あなたは？

私は、この村の小学校で先生をしている、ニシカワというものです。そんなことより、コリトル先生。ヒロミくんは、どこへ行ったんですか？ さつきまで一緒にいたはずですが。

トミー
(コリトル先生に) ゲックのことは秘密ですよ。

コリトル先生
(トミーに) わかっているわかってる。(ニシカワに) いいですか、ニシカワさん。ゲックのことは秘密なんです。

トミー
先生！

コリトル先生、お祭りが始まりますよ。

いや、私は通訳をするために来ただけで、お祭りなんてものには――出たくないんですか？

コリトル先生
すぐ出たいです。

だったら一緒に楽しみましょう。お祭りは、みんなで楽しむものですかね。

――――
M10「昔むかしの地球には」

パパ

ハア 昔むかしの夜空には
今の百倍 星が出た

流れ星など雨のよう

みんな傘さし歩いてた

全員

ハア 昔むかしの地球には
人のともだち もっといた

ママ

ハア 昔むかしの小川には
今の百倍 サカナいた

泳ぐ時にはザル持ってた

サカナどかして泳いでた

全員

ハア 昔むかしの地球には
人のともだち もっといた

パパ

ニシカワ先生。そんなこわい顔してないで、一つ歌ったらどうですか？

ニシカワ

いや、今はそれどころじゃないんです。(キョロキョロしている)

ママ

まあまあ、そんな固いこと言わないで。ニシカワ先生もお一つ。

ニシカワ

ママさん、いやがる人に無理やり歌わせてはいけませんよ。かわりに私
が——
私だつて、歌は大好きなんですよ。

ニシカワ

全員

ハア、昔むかしの田んぼには
今の百倍 カエルいた
あぜみち歩くと横でピョン
つられて人もピョンと跳んだ
ハア 昔むかしの地球には
人のともだち もっといた

パパ

コリトル先生

ママ

コリトル先生

トミー

コリトル先生

コリトル先生

全員

さあ、花火でも見に行きますか。
あの、私はまだ歌ってません。
コリトル先生も、歌がお好きなんですか？
はつきり言います。私は本当は動物学者なんかより、歌手になりた
かった！
本当ですか？
しかし、誰もスカウトしてくれなかった。（と泣く）
ハア、昔むかしのお山には
今の百倍 木があった
山は髪の毛フーサフサ
今じゃツルツル カツラくれ
ハア 昔むかしの地球には
人のともだち もっといた

ヒロミとゲックがやってくる。ヒロミは服の上にハッピをはおっている。ゲックは野球帽をかぶって、ヒロミの服を着ている。

ヒロミ
コリトル先生！

（ゲックに）ヒロミくん、遅かったじゃないか。もうお祭りは始まっているぞ。あれ？ どうしたんだ、野球の帽子なんかかぶって。野球の試合でも見に行くのかね？（帽子を取る）
ゲック。

ゲック
コリトル先生
トミー

ヒロミくんじゃない！
（帽子をゲックにかぶせて）ダメですよ、帽子を取っちゃ。せつかく変装してきたんだから。

コリトル先生
トミー

変装？
こうやって、ヒロミくんの服を着ていれば、人間の子どもに見えるでしょう？
なるほど。帽子をかぶれば、頭のお皿が隠せるわけだ。ヒロミくんもなかなかやるねえ。

コリトル先生

ニシカワ先生と村の子どもたちが寄ってくる。

ニシカワ
コリトル先生

ヒロミくん。君は今まで、どこへ行っていたんですか？
家へ行つて、ゲックに変装——

トミ

先生は黙つててください！

ニシカワ

変装？ 今、変装つて言いましたね？

トミ

いや、それはつまり……

ニシカワ

あ、そうか。そのハッピを着てきたんですね？

トミ

そうです、ハッピです。お祭りが出るなら、やっぱりハッピを着ないと

ニシカワ

ね。さあ、ヒロミくん。花火でも見にいきましょうか。(行こうとする)

トミ

待ちなさい。その、野球の帽子をかぶっている子は誰ですか？

ニシカワ

いや、この子はつまり——

ヒロミ

あなたには聞いてません。ヒロミくんに聞いてるんです。

ニシカワ

この子は……、この子は、僕の友だちです。

トミ

帽子で顔が見えませんか。ちよつと帽子を取つてくれませんか？

ニシカワ

ダメです！

トミ

どうしてですか？

ニシカワ

いや、この子は、とっても寒がりなんです。帽子を取ると、すぐに風邪

トミ

を引いてしまうんです。

ニシカワ

寒がりですつて？ (ゲックに近寄つて) この手ぬぐいをマフラーのかわ

トミ

りにしなさい。(手ぬぐいを渡して) 風邪には気をつけるんですよ。

ニシカワ

(村の子どもたちに) みんな、他を探しに行きましょう。

ニシカワ先生と村の子どもたちが去る。

トミー
コリトル先生
よかったですね、帽子を取られなくて。
しかし、あの人もなかなか優しい人じゃないか。

パパとママが寄ってくる。

ママ
ヒロミ、そのハッピーはどうしたの？

ママ
友だちにももらったんだ。

ママ
友だちですって？ この子はまたウソをついて。

ママ
ウソじゃないよ。(ゲックを指さして) ほら。

ママ
あなたがヒロミのお友だちですか？

ゲック
クエ。

ママ
今、なんて言ったの？

ママ
「そうだよ」って言ったんです。

ママ
失礼ですけど、あなたの名前は？

ゲック
ゲック。

ママ
ゲック？

トミー
黒沼ゲックって言うんです。珍しい名前でしょう？

ママ
あなたがゲックだったんですか？ ごめんね、ヒロミ。ママったら、み

ママ
んなヒロミの作り話かと思ってたのよ。

ママ
そうか。とうとうヒロミにも友だちができたのか。

ママ
うん。

ママ
黒沼ゲックくんですか？

ママ
パパ

ママ
ヒロミ

ゲック

パパ

ゲック

パパ

コリトル先生

パパ

トミー

コリトル先生

パパ

コリトル先生

トミー

花火の音。

パパ

ママ

パパとママが去る。

トミー

ゲック。

どうか、ヒロミと仲良くしてやってください。
クエ。

ところでゲックくん。人と挨拶をする時は、帽子を取った方がいいな。
それがマナーというものですよ。

パパさん、この子はとっても熱がりなんですよ。
熱がり？

先生！ 熱がりじゃなくて、寒がりですよ！
しまった！

熱がりだったら、帽子なんかかぶらない方がいい。さあ、早く取って。
いや、この帽子は、実は北極で作った帽子なんですよ。だから、かぶる

ととっても涼しいんです。
もう、先生はウソが下手なんだから！

あれ、花火が始まったみたいだな。急いで行かないと、いい席を取られ
てしまうぞ。

ゲックくんも一緒にいらっしやい。

よかった。今度はもうダメかと思いました。

コリトル先生

どうだ。私だって、たまにはうまいウソがつけるだろう。

トミー

全然うまくありませんでした。

コリトル先生

さあ、私たちも花火を見に行こうじゃないか。

ヒロミ

ゲック、行こう。

ゲック

クエ。

そこへ、タクヤがそつと忍び寄ってくる。ゲックの後ろに近づいて、帽子を取る。

ゲック

クエック！

ニシカワ先生と村の子どもたちが飛び出す。

ニシカワ

ほら、見なさい！ あの子はやっぱり、カッパだったんです！

―――
M「誰かは誰かのものじゃない」

ニシカワ

どこへ連れてくつもりだ
何をしようと言うんだ
誰がいいと言ったんだ
カッパはこの村のものだ

トミー

どこへも連れていかない
何もしようとしてない
ただお祭りに行きたい
ゲックが そう言っただけさ

ニシカワ

ウソをついても無駄だぞ
おまえたちの目的は
最初からわかっていた
カッパを 盗む気なんだろう

コリトル先生

盗むつもりなんかない

コ・ト・ヒ

人は人を盗めない
動物だって同じだ
ゲックは誰にも盗めない
誰かは誰かのものじゃない
誰かは誰かのものじゃないから

ニシカワ

カッパはこの村のもの
この村で生まれたから
よそから来たおまえらに
カッパは渡しはしない

トミー

どこへ行こうと自由さ
何をしようど自由さ
誰にも止められないさ
ゲックは誰のものでもない

ニシカワ

カッパがこの村にいる
それが有名になったら
みんながこの村へ来る
カッパは村の財産だ

コリトル先生

人が誰もやっこない
静かな森でゲックが

コ・ト・ヒ

暮らすためにはそつと
ゲックをしておいてほしい
誰かは誰かのものじゃない
誰かは誰かのものじゃないから

ニシカワ

さあ、カツパをこつちへよこしなさい。

コリトル先生

ゲックをどうするつもりですか。

ニシカワ

村の警察へ連れて行きます。あなたたちみたいな人に、盗まれないよう
うにね。

コリトル先生

ゲックは森の中で暮らしてきたんだ。だから、森へ帰してあげるべきで
す。

ニシカワ

そんなことを言って、本当は都会へ連れていくつもりなんでしょう。

コリトル先生

なんのために。

ニシカワ

テレビに出るためですよ。「コリトル先生、カツパを発見」てね。

コリトル先生

バカバカしい。本当にそうしたいのは、あなたの方でしょう。

ニシカワ

つべこべ言わずに、カツパをこつちによこしなさい！

ニシカワ先生がゲックに近寄る。ゲックが逃げる。

ニシカワ

しまった！ 逃げられた！ みんな、急いで後を追うんです！

ニシカワ先生と村の子どもたちが走り去る。

トミー
コリトル先生
ヒロミ
コリトル先生
ヒロミ
コリトル先生
トミー

トミー、どうしましょう。
ヒロミくん、ゲックは君の友だちだね？
そうです。
友だちが困っている時に、しなければならぬことはなんだね？
助けることです。自分にできるだけのことをして。
よし。急いで後を追うんだ。私は、動物たちの力を借りることにする。
行こう、ヒロミくん！

トミーとヒロミが走り去る。

———M12「鳥が空を飛ぶのを見て」

コリトル先生

鳥が空を飛ぶのを見て
人は空を飛びたくなり
人は鳥の翼をまねて
飛行機を作った
人は人だけでは何も
できないから地球の
他の友だちに教えて
もらって生きてきた

コリトル先生

ジップ！ ダブダブ！ チーチー！ ガブガブ！ ポリネシア！

五匹の動物たちがやってくる。

コリトル先生

動物たちの力が必要なんだ。君たちも、力を貸してくれる動物を集めてくれ。

コリトル先生

魚が海を泳ぐのを見て
人は海を泳ぎたくなり
人は魚の形をまねて
船を作った

コ・五匹

人は人だけでは何も
できないから地球の
他の友だちに教えて
もらって生きてきた

コリトル先生

この村に住んでいる動物たち！
どうか私に力を貸してくれないか！

コリトル先生がいろんな動物の言葉で叫ぶ。五匹の動物たちも、それぞれの動物の言葉で叫ぶ。すると、いろんなところから、村の動物たちがやってくる。

コリトル先生

みんな、よく来てくれたね。みんなは、くらくら森のくろくろ沼に住んでいる、ゲックというカッパを知っているかな？

コリトル先生の言葉を、五匹の動物たちが他の動物たちに通訳する。

コリトル先生

実はそのゲックが、この村の人間に追いかけられているんだ。君たちに
は、その人間より先に、ゲックを見つけ出してもらいたい。できるかな？

動物たちが、それぞれの言葉で返事をする。

コリトル先生

君たち動物に迷惑をかけるのは、いつも人間だ。本当にすまないと思っ
ている。が、ヒロミという人間の男の子は、今、ゲックのために一生涯懸
命戦っているんだ。ヒロミくんのためにも、ゲックを助けてやってくれ
ないか？

動物たちが、それぞれの言葉で返事をする。

コリトル先生

ありがとう。ところで、この会場にいる人間たちはどうだろう。君たち
も、ゲックを助けてくれるかな？

会場の子どもたちが、それぞれ返事をする。しなかったら、コリトル先生がなんとかす
る。

ポリネシア

さあ、私たちはゲックを探しに行きましょう！

コリトル先生

頼んだぞ、みんな！

コリトル先生、五匹の動物たち、村の動物たちが走り去る。

ゲックがやってくる。周りをキョロキョロを見ている。反対側から、トミーがやってくる。

トミー ゲック！ こっちだよ、こっち！

中央で会う。

トミー ダメだよ、いきなり逃げたりしちゃ。コリトル先生と一緒にいれば、何

も心配することはないのに。

ゲック （後ろを指さし）クエック！

トミー え？ どうしたの？ 誰かの来たの？

遠くに、ニシカワ先生が現れる。

ニシカワ 今、カッパの鳴き声がありましたね。

トミー まずい！ どこかへ隠れないと。

トミーとゲックが客席の通路に隠れる。

トミー (お客さんに) ゲックがここにいるって、絶対に言わないでくださいね。

ニシカワ 先生がやってくる。

ニシカワ 確かにこの辺で聞こえたんですがね。よし、しらみつぶしに探してみま

すか。(お客さんに) あなたはカッパを知りませんか? あなたは?

トミー (立ち上がって) よし、反対側へ行こう。

トミーが反対側の通路へ行く。

トミー クエック!

ニシカワ おや、あつちで鳴き声がありましたね?

ニシカワがそちらの通路へ行く。その間に、トミーが別の通路へ行く。

トミー クエック!

ニシカワ あれ、今度はあつちから聞こえた。

ニシカワがそちらの通路へ行く。その間に、トミーが中央へ行く。

トミー そうだ。ここにいるみんなが鳴き声を出してくれれば、ゲックがどこに

いるか、わからなくなるぞ。みなさん、お願いします。僕と一緒に、

ニシカワ
トミー

「クエック」って言ってみてください。クエック！
今度はあっちだ。まったくカッパというのは、すばしこい動物ですね。
さあ、みなさんも一緒に、クエック！

会場の子どもたちが、口々に「クエック」と言う。言わなかったら、トミーがなんとかする。ニシカワがあっちこっちを走り回る。とうとう目を回して、倒れてしまう。トミーとゲックがそこへ駆け寄って、ニシカワが気絶したのを確かめる。

トミー

みんな、どうもありがとう。

トミーとゲックが去る。反対側から、コリトル先生とポリネシアがやってくる。

ポリネシア

先生、急いでください。この村のスズメが、この辺りでゲックを見たそうです。

コリトル先生

しかし、ゲックはいないじゃないか。そのかわりに、人が地面に寝ているぞ。もしもし、こんな所で寝たら、風邪を引きますよ。

ニシカワ

(目を覚まして)クエック！

コリトル先生

どうしたんですか、カッパの言葉を話したりして。

ニシカワ

たくさんのカッパが、「クエック」と叫びながら、私に襲いかかってき

たんです。全部で五万匹はいました。

コリトル先生

くらくら森にいるカッパは、ゲック一匹だけですよ。

ニシカワ

ということは、私は騙されたんですね？ カッパのやつめ、絶対に許さないぞ。

ニシカワが去る。

コリトル先生　ニシカワ先生、待ってください！

コリトル先生とポリネシアが去る。反対側から、ヒロミがやってくる。

ヒロミ　ゲック！　ゲック！

ヒロミの後を追って、村の子どもたちがやってくる。

タクヤ　待てよ、ヒロミ！

ヒロミ　ついてくるなよ。僕は今、忙しいんだ。

カズコ　あなたはカッパの友だちだと言ってたわね？　それ、本当？

ヒロミ　本当だよ。だから、こうやって探してるんだ。

タクヤ　カッパって、こわくないのか？

ヒロミ　こわくないよ。僕にこのハッピをくれたのは、ゲックなんだ。人間の言

葉は話せないけど、僕の名前が変わってるって、バカにしたりもしなかつた。

カズコ　あれは、とつても悪かったと思ってるのよ。

タクヤ　俺たちさ、カッパの友だちになりたいんだ。

ヒロミ　君たちが？

カズコ　あたしたちも、カッパと一緒に遊びたいのよ。

タクヤ
ヒロミ

俺たちじゃ、友だちにはしてくれないかな？
友だちになりたっかたら、ゲツクを助けてよ。そろそろ沼に帰らないと、
大変なことになるんだ。

カズコ
ヒロミ

大変なことって？
お皿の水が、なくなるんだよ。

そこへ、トミーがゲツクを背負ってやってくる。

トミー

ヒロミくん！ 大変なんだよ。ゲツクの様子がおかしいんだ。

トミーがゲツクを下ろす。

トミー

一緒に走っていたら、急に立ち止まって、動かなくなっただ。おでこ
にさわったら、すごい熱なんだ。

ヒロミ

（ゲツクの帽子を外して）お皿が乾き始めてる！
え？ お皿が乾くと、何かまずいことがあるの？

ヒロミ

僕と一緒に遊んでる時も、お皿が乾きそうになったことがあるんです。
ゲツクは慌ててくるくる沼に飛び込んで、お皿をぬらしました。

トミー

それじゃ、急いでゲツクをくるくる沼まで運ばないと。
運んでる間に乾いてしまったらどうするんです。

ヒロミ

水だ。水ならなんでもいいはずだ。誰か、この近くに水がある所を知ら
ないか？

タクヤ

僕が知ってる。急いで持ってくるよ。

カズコ あたしも。

村の子どもたちが去る。

ヒロミ ゲック！ しっかりしろよ、ゲック！

ニシカワ先生がやってくる。

ニシカワ

とうとう見つけましたよ。さあ、ヒロミくん、カッパをこっちへよこしなさい。

ヒロミ

ゲック！　ゲック！

ニシカワ

ちよつと、ヒロミくん、聞いてるんですか？　ヒロミくんてば！

トミ

うるさいなあ。ちよつと黙っててくれませんか？

ニシカワ

あれ？　カッパがどうかしたんですか？

トミ

見ればわかるでしょう。お皿が乾いてしまいそうなんです。

ニシカワ

（お皿を見て）本当だ。誰がこんなひどいことを。

トミ

あなたが悪いんですよ。

ニシカワ

私が？

トミ

あなたがゲックを追い回すから、ゲックはたくさん走らなければならな

ニシカワ

かった。おかげで、体が熱くなって、お皿の水が蒸発したんです。

ニシカワ

私は、こんなことになるとは思わなかったから……。

コリトル先生とポリネシアがやってくる。

ポリネシア

先生、急いでください。この村のカラスが、この辺りでゲックを見たそうです。

コリトル先生

あっ、あそこだ！

トミー

コリトル先生！ 大変なんです。ゲックのお皿が――

コリトル先生

わかっている。この村の動物たちが、全部教えてくれたよ。

トミー

今、この村の子どもたちが、水を取りに行ってるんです。

村の子どもたちが戻ってくる。みんな手に水筒を持っている。

タクヤ

水を持ってきたよ！（水筒を差し出す）

コリトル先生

こっちによしなさい。（水筒を受け取る）

コリトル先生が水筒を開け、水をゲックの頭のお皿に注ぐ。

トミー

どうですか？

コリトル先生

ダメだ。水がお皿に染み込まない。

ヒロミ

そんな。沼にいる時は、どんどん染み込んでいったのに。

コリトル先生

この水は、どこから持ってきたんだね？

タクヤ

村長さんの家の水道です。

コリトル先生

ゲックはくろくろ沼で生まれて、くろくろ沼で育ったんだ。くろくろ沼

ニシカワ

の水でなければ、ゲックのお皿には染み込まないんだ。

トミー

だったら、くろくろ沼に連れていけばいいじゃないですか。

ここから何キロ離れていると思ってるんです。途中でお皿が乾いてしま

ニシカワ

ヒロミ

トミー

ヒロミ

ニシカワ

ヒロミ

ニシカワ

コリトル先生

ニシカワ

コリトル先生

ニシカワ

コリトル先生

ポリネシア

つたら、ゲックは……。

私が背負って走り出すよ。私はこう見えても足が速いんだ。こんなことになつてしまったのは、元はと言えば私が悪いんだから。

悪いのは僕です。

君は何も悪くないよ。

ゲックがお祭りに行きたいって言った時、僕は決心したんだ。ゲックは僕の友だちだから、どんなことがあつてもゲックを守るって。それなのに、僕はゲックを守ることができなかつた。

いいえ、悪いのは私です。

いいえ、僕です。

私と言つたら私なんです。さあ、ゲックを私の背中に乗せてください。くろくろ沼まで、時速一〇〇キロで走ってみせますよ。

人間は、そんなに速く走れませんよ。カール・ルイスだって、時速三六キロしか出せないんですよ。

やっぱり車にしましょう。

くらくら森の中を、どうやって車が走るんです。

それじゃ、どうすればいいんですか。ゲックをこのまま放っておけつて

言うんですか？

動物の助けを借りるんですよ。ポリネシア、みんなに合図を送つてくれ。

オーケー！

ポリネシアが空に向かって手を振る。すると、いろんなところから、村の動物たちがやってくる。四匹の動物たちもやってくる。

コリトル先生

みんな、カッパのゲックは見つかつた。協力してくれてありがとう。しかし、またお願いがあるんだ。ゲックの命を助けるために、くろくろ沼から水を運んできてほしい。しかも、なるべく早くだ。

ヒロミ

みなさん、お願いします。僕の友だちを助けてください。

ニシカワ

私からもお願いします。二度と、ゲックを沼から引き離そうとはしませんから。

コリトル先生

どうだろう。この二人の頼みを聞いてくれるかな？

動物たちが、それぞれの言葉で返事をする。

コリトル先生

よし、動物たちに、水筒を渡すんだ。

村の子どもたちが、村の動物たちに水筒を渡す。水筒を受け取った動物から、沼へ向かって出発する。

—————M13「鳥が空を飛ぶのを見て・2」

コリトル先生

馬が速く走るのを見て

人は速く走りたくなり

人は馬の力を借りて

馬車を作った

コトヒニ子

人は人だけでは何も

トミ

コトヒニ子

できないから地球の
他の友だちに教えて
もらって生きてきた

ラクダが砂漠を渡るのを見て
人は砂漠を渡りたくなり
人はラクダの力を借りて
キャラバンを作った
人は人だけでは何も
できないから地球の
他の友だちに教えて
もらって生きてきた

五匹の動物たちと村の動物たちが戻ってくる。

トミー　あつ！　動物たちが帰ってきた！
 コリトル先生　さあ、私に水筒をくれ。

ジップがコリトル先生に水筒を渡す。コリトル先生が水筒を開け、水をゲックの頭のお皿に注ぐ。

トミー　どうですか？
 コリトル先生　よし、今度は水が染み込んで。もう大丈夫だ。ゲックは助かるぞ。
 ヒロミ　本当ですか？
 コリトル先生　しかし、それにしても、ちつとも目を覚まさないなあ。
 ニシカワ　まさか、このまま一生眠ってるんじゃないでしょうね？
 トミー　変なことを言わないでください！
 コリトル先生　いや、それはありえないことではないぞ。お皿が乾いたショックで、ゲックの魂はどこかへ飛んでしまったのかもしれない。
 ニシカワ　くろくろ沼に帰ったんでしょか？
 コリトル先生　だとすれば、魂が体に戻ってこない限り、ゲックは目を覚まさない。

ヒロミ
コリトル先生

それじゃ、ゲックはもう……。
諦めるのはまだ早い。私たちの力で、ゲックの魂を呼び戻してやればい
いんだ。

トミー
どうやってですか？

ヒロミくん。君がゲックに会った時、ゲックは歌を歌っていたんだよね？

トミー
それはどんな歌だった？

コリトル先生
そんなの、覚えてません。

よく思い出すんだ。君がゲックの歌に誘われて、森の中へ入っていった
ように、ゲックの魂も歌に誘われて、ここに戻ってくるかもしれない
だ。

トミー
えーと、確か、こんな歌です。……ララララ。

ニシカワ
その歌なら知ってますよ。この村に昔から伝わる歌です。私が歌います
から、みなさんも覚えて、一緒に歌ってください。

———
M14「友だちの名前」

ニシカワ

誰もが一つずつ持っている
おなかにおへそに命に名前
こんな人になつてほしいと
父さんと母さんがつけた名前
だから僕の友だちには
僕の名前を呼んでほしい
僕の名前は僕の友だちに

呼んでもらうためにあるから
ヒロユキ ヒロユキ ヒロユキ

コリトル先生
ニシカワ
コリトル先生
あなたの名前はヒロユキというんですか。
そうですね。いい名前でしょう？
なかなかいいが、ジョンにはかないませんな。

トコヒニ子動

誰もが一つずつ持っている
あたまにおでこに命に名前
友だちになった君にだって
ちやんと一つ ついてる名前
だから今度は友だちの僕に
君の名前を呼ばせてほしい
僕は君が大好きだから
君の名前も大好きだから
ゲック ゲック ゲック

トミー
コリトル先生
ゲックは目を覚ましましたか？
まだダメだ。よし、みんなでゲックの名前を呼ぼう。名前を呼べば、ゲ

みんな
コリトル先生
みんな
ゲックの魂が戻ってくるかもしれない。さあ、みんな！
（客席に向かって）さあ、みんなも手伝ってくれ！
ゲック ゲック ゲック

コリトル先生

みんな

ヒロミ

トミー

ニシカワ

(客席に向かつて) さあ、もっと大きな声で！
ゲック ゲック ゲック
あつ！ ゲックの目が開いた！
ゲックの魂が戻ってきたんですよ！
やったあ！ ゲックが助かったぞ！

みんなが飛び上がって大喜び。そこへ、パパとママがやってくる。

パパ

コリトル先生

ヒロミ、こんな所で何をやってるんだ。もう花火は終わっちゃったぞ。
パパさん。ヒロミくんはやりました。自分の友だちを、ちゃんと守り抜いたんです。

パパ

ママ

ヒロミ

友だちって、さっき会った黒沼ゲックくんのことですか？

(ゲックを見て) まあ！ この子は人間じゃないわ！

パパ、ママ、隠したりしてごめん。ゲックは、くらくら森のくろくろ沼に住んでいるカッパなんだ。

パパ

ヒロミ

くろくろ沼に住んでいるカッパだって？

そうだよ。名前は本当にゲックって言うんだ。

パパ

コリトル先生

ゲック？ ゲックだった？

どうかしたんですか、パパさん？

パパ

ヒロミ

私も子どもの頃、他の人に黙って、くろくろ沼に行ったことがあるんです。

「ゲックゲック」と鳴いていました。

ヒロミ

それってもしかして、ゲックだったの？

パパ

トミー

パパ

ヒロミ

パパ

コリトル先生

パパ

コリトル先生

パパ

ゲック

パパ

トミー

コリトル先生

パパ

ヒロミ

しかし、あれからもう何十年も経ってるんだ。あの時の動物だって、私と同じように大人になっていくはずだ。

もしかして、このハッピーに見覚えはありますか？

そう言えば、お祭りの次の日にそんなハッピーを着て、くろくろ沼に行つたことがある。その動物がほしがつてみたいだったのであげたんだ。

それで、来年になったら、きっとお祭りに連れて行ってやるって約束した。私の言葉の意味がわかったのか、動物はうれしそうに何度もうなず

いていた。

ゲックだ。パパが友だちになったのは、このゲックだったんだよ。

しかし――

（ハッピーのすそをめぐって）お父さんの名前は、ヒロタロウですわね？

どうして知ってるんですか？

（ハッピーのすそを示して）ここに書いてあるんですよ。雨でにじんで、ほとんど読めなくなっているけど、この字は確かに「ヒロタロウ」だ。

それじゃ、おまえは本当に、あの時の動物なのか？

（不思議そうにパパの顔を見ている）

あれからもう何十年も会ってないんだ。私のことは覚えてないか。

もしかして、ゲックはヒロミくんを、パパさんだと思ったんじゃないですか？

だから、そのハッピーを「返す」って言ったんじゃないですか？

そうか。だから、「約束を守れ」って言ったんだ。「お祭りに連れてい

け」って言ったんだ。

私のかわりに、ヒロミが約束を果たしてくれたわけですか？

パパはどうして約束を守らなかったの？

パパ

ヒロミ

パパ

ヒロミ

忘れてたんだよ。中学に入ってから、勉強が忙しくなると、ゲックのことはすっかり忘れてしまったんだ。それなのに、ゲックはずっと忘れなかつた。
ゲックは、パパのことを、友だちだと思ってたんだよ。
しかし、今はヒロミが友だちだ。ヒロミ、パパのかわりに約束を果たしてくれて、本当にありがとう。
ゲックは、僕の友だちでもあるんだから。
パパのかわりじゃないよ。ゲックは、僕の友だちでもあるんだから。

くらくら森の中。たくさんの動物たちが現れる。動物たちは今、眠りにつこうとしているのだ。そこへ、コリトル先生、トミー、五匹の動物たち、ヒロミ、パパ、ママ、ニシカワ、村の子どもたち、ゲックがやってくる。ゲックが森の動物たちとともに、森の奥へ去っていく。みんなが手を振る。

コリトル先生
ニシカワ

ニシカワ先生、これからゲックをどうするつもりですか。もちろん、警察へは連れていきませんよ。あなたたちには、ゲックを盗むつもりなんてなかったから。それに、ゲックをこの沼から引き離れたら、また大変なことになりますからね。

トミー
ニシカワ

カッパがこの村にいて、世界中に宣伝するんですか？ それをやめました。私だって、ゲックの友だちです。友だちのいやがることを、勝手にするわけにはいきません。

ヒロミ
コリトル先生

それじゃ、ゲックがここにいることは、僕たちだけの秘密なんです。友だち同士の秘密だ。誰にも話してはいけませんよ。

トミー
ヒロミ

一番秘密が守れないのは、先生でしょう？
(ママに) 明日もまた、ここへ遊びに来ていいよね？

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

ママ

いいわよ。せっかくできた友だちなんだから、ケンカしないでなかよくするのよ。

男の子なんだから、ケンカの一回や二回、してもいいさ。

パパ。

口ゲンカまで我慢した方がよさそうだな。

僕たちも、ここへ遊びに来ていいかな？

いいよ。君たちも、ゲツクの友だちになったんだから。

それじゃ、ヒロミくんとあたしたちも友だちね？

あたしもね？

うん。

友だちがいつぺんに増えてよかったな。さあ、私たちはそろそろ帰るところにしようか。

え？ もう帰っちゃうんですか？

世界には、私の知らない動物が、まだまだたくさんいます。私の仕事は、その動物たちと友だちになること。これでもなかなか忙しいんですよ。

コリトル先生。本当にありがとうございます。

こちらこそありがとうございます。君が手紙を出してくれたおかげで、君やゲツクや、この村の人たちや動物たちと知り合うことができました。なかなか楽しい旅だったよ。

先生、旅はまだこれからですよ。帰り道では迷子にならないようにしてくださいね。

わかっているわかってる。もし迷子になったら、私たちが進むべき道は、動物たちが教えてくれるさ。それではみなさん、ごきげんよう。

みんな

旅に出よう出よう出よう
そう思ったら
指を空に空に空に
向かって立てろ
風は教えてくれるだろう
行きたい時に行きたい所へ行けと
だから僕らも行こうよ
風が僕らも応援してるよ
風は僕らの味方

五匹の動物たちが、マストを立て、帆をはる。その下に、コリトル先生とトミーが立つ。
みんなが手を振っている。

ド・ト・五匹

風はいつもいつもいつも
旅をしている
空がずっとずっとずっと
続かなかぎり
空には国境がないから
行きたい時に行きたい所へ行ける
だから僕らも行こうよ

風も僕らを応援してるよ
風は僕らの味方

コリトル先生、トミー、五匹の動物たちが手を振っている。僕らに向かって、「さよなら」と言っているのだ。

∧ 幕
∨